

南十字星の下の海外シンポジウム

郭 南 燕

二〇一六年一月二三日から二六日まで、ニュージーランドのオタゴ州首都ダニーデン市 (Dunedin) にあるオタゴ大学 (University of Otago) との共催で、「南太平洋から見る日本研究・歴史、政治、文学、芸術」をテーマとする第二三回の日文研海外シンポジウムを開催することができた。

オタゴ大学は、一八六九年設立のニュージーランド初の高等教育機関で、当時の移民 (ヨーロッパ人と華人) が南島のオタゴ州で開拓した金鉱業で蓄積した富によるものである。四つの学部 (人文学部、理学部、医学部、商学部) をもち、完備した科目を誇るこの世界最南端の大学は、ニュージーランドの他大学より遅れて、一九九三年二月に日本語プログラムを開設した。それに尽力した私は、未熟のため、苦しくて寂しかった。慰めてくれたのは、毎晩仰ぎ見る銀河と南十字星のかすかな光であった。

在職一五年間、同僚たちとの協力で、日本語 (初級～上級)、日本の文学、映画、社会事情などの講義を提供し、学士、修士、博士学位を授与し、優秀な学生を輩出することができた。日本研究の発展は、一九九六年に日本語科に赴任したロイ・スターズ先生と、二〇〇四年に歴史学科に赴任した将基面貴巳先生に負うところが極めて大きい。

今回の海外シンポジウムは、将基面教授 (歴史学科長) との一年半の共同準備を経て、

ニュージーランド、豪州、フィジー、米国、日本からの研究者の参加を得て開催することができた。シンポジウム前日（二三日）は、シンポジウムの幕開けとして、米国ペンシルヴァニア大学のフレデリック・ディキンソン先生の公開講演「The First World War as Global War: Japan, New Zealand and the Dawn of an Asia/Pacific World」が行なわれた。第一次世界大戦への関わり方を通して、ニュージーランドと日本が地理的に遠く離れているにもかかわらず、政治的、経済的に密接な関係を百年以上保ち、アジア太平洋の全体性を作り出していたことを教えてくれた。

二四日と二五日のシンポジウムでは二つの基調講演があった。初日には日文研小松和彦所長から「ミクロネシアの離島で日本文化を考える——妖怪譚を中心に——」と題した講演を行い、三〇年前に科研費によって約一〇年間にわたって調査したミクロネシア諸島のキリスト教導入前の家族関係と怪談を紹介し、そこから日本の家族と民話を眺め直して、社会の基本的人間関係への理解がその国の歴史、伝統、文化への研究といかに関係するかという「異文化理解の心得」を示唆する内容であった。この講演は、妖怪研究を大成させた「小松学」の出発点の回顧と整理のきっかけにもなっている。

二五日にはオークランド大学のマーク・マリンスズ教授から「Public Intellectuals, Neoliberalism, and the Politics of Yasukuni」と題した講演があり、靖国問題に対する日本知識人の態度の変遷を辿り、日文研創設者の一人で現在も顧問を務める梅原猛先生の公式参拝への長期に渡る反対意見を紹介し、日文研関係者にとって印象深い内容であった。

二日あわせて六つのセッション「日本の古代歴史と文学」「江戸時代の社会と文化」「現代日



ヘレン・ニコルソン教授（オタゴ大学）へお土産を渡す小松和彦所長

本の政治と思想」「太平洋諸島と日本」「近現代日本文学と社会」「日本のテレビ、映画、大衆文化」があり、合計二三本の発表があった。中心テーマ「南太平洋から見る日本研究」を反映するように、ディキンソン先生の公開講演と小松先生の基調講演のほか、オタゴ大学のグレン・サマー・ヘイズ先生の「An Austronesian Presence in the Sakishima Islands: an Archaeological Update」は、先史時代の沖縄先島諸島に残るオーストロネシア人の遺跡を通して、太平洋民族の移動の考古学的資料を紹介し、ディキンソン先生の「“Nanyō” in the Rise of a Global Japan, 1919-1931」は戦間期の日本に与えた南洋の政治、経済、軍事の影響力を究明し、オタゴ大学のジュディ・ベネット先生の「After the Plane Crashed: Reactions to the Deaths of Japanese World War II Internees at Whenuapai, New Zealand」は第二次世界大戦中のニュージーランド抑留日本捕虜の飛行機遭難事件がい

かに闇に葬られたのかを振り返った。フィジーの南太平洋大学、リョータ・ニシノ先生の「Toward a Future of Travel Writing and History: Collecting, Researching and Reflecting on Southwestern Pacific Islanders' Experiences of the Pacific War」はバプア・ニューギニアとソロモン諸島への日本軍侵略の史実がいかに現在の日本人旅行者に語りかけられ、記録されているのかを考察した。関西大学のアレキサンダー・ベネット先生の「A Study of Japanese Martial Arts in New Zealand up to the Second World War」は日本の柔術が一九世紀末期からイギリスと米国を経由してニュージールランドに輸入されて広く歓迎されたことを、新聞・雑誌の記事と映画を通して論述し、オタゴ大学のヘンリー・ジョンソン先生の「Japan in New Zealand: *Tariko* and Identity in Transcultural Context」はニュージールランドにおけるさまざまな和太鼓の演奏グループの状況を紹介し、二〇一五年のオタゴ大学の卒業式に和太鼓の演奏があったことを教えてくれた。以上のように、多方面から日本と南太平洋との歴史的、地理的、民俗的、政治的、軍事的、文化的関係に議論が展開された。

他のセッション発表も、日本の歴史、政治思想、文学、大衆文化を取り上げ、高い水準を示している。発表順序にしたがって紹介する。ウェリントン・ヴィクトリア大学のエドウィーナ・パルマー先生の「Bronze Bells in Early Japan: "Swallowed" by the Mountains: A New Interpretation of Their Ritual Purpose」は古代日本の銅鐸の語源を探り、その儀礼性への新しい解釈を試み、オークランド大学のエレン・ナカムラ先生は「Yamawaki Takako's Bittersweet Memories of Uwajima Castle, 1864-1865」はシーボルトの孫娘山脇高子が宇和島城で過ごした意味を分析し、豪州マードック大学の森山武先生の「一九世紀前半の社会変化と辺境への知の流れ——佐渡人柴田収蔵の読書と遊学、地図製作」は、佐渡出身の知識人の作成した世界地図の影響範囲を論

じたものである。

将基面貴曰先生の「Debating Japanese Patriotism in the Global Context: Alfred Lignean and the Controversy on *The Clash between Education and Religion*」は井上哲次郎の「教育と宗教の衝突」に対するパリ外国宣教会のリギョール神父の観点を紹介し、この有名な論争を初めてグローバルな文脈に位置付けた。マードック大学のサンドラ・ウィルソン先生の「What Difference Did the Second World War Make to Japanese Nationalism?」は第二次世界大戦が日本のナシヨナリズムの発展にいかなる影響を与えたのかを論じ、オタゴ大学のヴァネッサ・ワード先生は「Taking the Ordinary People Seriously: the Institute for the Science of Thought and Democracy in Early Postwar Japan」におつて、「思想の科学」の人々の思想と活動を紹介している。

シドニー大学のマッツ・カールソン先生の「The Noble Art of Procrastination: Writer's Block as a Motif in *Watakushi shosetsu*」は私小説に繰り返し現れる作家の創作困難の意義と様式を論じ、カンタベリー大学のスーザン・ブーテレイ先生の「Okinawa's Fictional Landscapes: A Reading of Medoruma Shun's *Suiteki* (Droplets)」は沖縄出身の目取真俊の芥川賞受賞作『水滴』における沖縄の空想された風景と戦争の記憶を考察する。豪州ウーロンゴン大学のヘレン・キルパトリック先生の「Animating the Animal in Post-3.11 for Young People: *Kibō no Bokujō* (The Farm of Hope)」は、東日本大震災後の少年読者を相手にする『希望の牧場』の動物描写のものが現実世界の風刺を分析している。

オークランド大学のエメラルド・キング先生の「“And I'll Form the Head!” Cosplay as an Adaptive Process」は、コスプレの定義、文化的意義、「文化翻訳」としての意味を熱く説明する。ワイカト大学のアリステア・スウェール先生の「Shinkai Makoto—the “New Miyazaki”

or a New Voice in Cinematic Anime?」は、アニメ作家新海誠の作品を取り上げ、アニメに反映された日本の政治と社会を論じ、大衆文化の発展をいち早くキャッチする鋭敏さを示している。オタゴ大学の柴田優呼先生の「開放後中国と戦後日本の、甘美ではる苦い追憶——『非誠勿擾』と「知床旅情」——」は、中国人の日本旅行ブームの火付け役ともなった有名な映画『非誠勿擾』と日本の有名な歌に通じる社会的背景の異同を分析する。

日文研からも五人が発表している。荒木浩先生の「へ妊娠小説」としてのブツダ伝——日本古典文学のひながたをさぐる」は東南アジア伝来のブツダの子供誕生の諸説と光源氏の息子柏木の誕生とを比較し、『源氏物語』がブツダ伝から受けた影響の可能性に言及している。石上阿希先生の「出版物にみる知識の収集と展開——絵入百科事典を中心に——」は江戸期の『訓蒙図彙』に現れた万国人物の表象と変遷を取り上げ、当時の社会のもつ海外知識の一端を示す。ジョン・ブリン先生の「Ise's Modern Transformations or the Pleasures of Pilgrimage in 19th Century Japan」は伊勢神宮の俗的空間と聖的空間の形成の過程を比較研究する。北浦寛之先生の「草創期の日本のテレビ・ドラマ制作・映画との比較の中で」は初期のテレビ・ドラマ『私は貝になりたい』の構造、モチーフ、製作を論じる。

井上章一先生の「現代風俗に見るキリスト教」は、女性ファッション雑誌の読者モデルの出身校の大半がミッシェン・スクールであること、日本の偽教会で偽牧師の前で愛を誓い、結婚式を挙げる日常的现象を例に、日本社会がいかにキリスト教の外的イメージに憧れているのかを考察するものである。関西大学で教えるニュージールランド教員アレクサンダー・ベネット先生は、自分も留学生だった時に、アルバイトとして偽牧師をしたことが何回もあると告白して、場内を賑わわせた。井上先生は大方の人に見過ごされがちな社会現象を見つめ直す機会を

提供してくれているが、その主旨が誤解されて、女性を性的対象として扱っているというコメントがあった。異文化理解は、誤解が伴われるのだと改めて思わせられる。

今回のシンポジウムは、日文研が南太平洋の日本研究と協力し、それを支援する姿勢が明確に打ち出されて、南太平洋の諸大学の日本研究の展開に非常に意義のあることである。そればかりではなく、ペンシルヴァニア大学とオタゴ大学がこれから展開する太平洋文化についての交流のきっかけをつくることにもなっている。海外シンポジウムの開催は、広い波及効果があり、「日本研究」だけではなく、グローバルな文化研究にも役に立っているようである。本シンポジウムを支援してくださったオタゴ大学と駐ニュージーランド日本大使館にも深く感謝を申し上げる。

学会発表が終わって長雨が止み、晴れ渡った夜空を仰ぎ見ながら、参加者たちに南十字星の探し方を示すことができたことは、私の大きな自慢だった。

(国際日本文化研究センター准教授)